

あり、フィールドワークの後半には（ほんの1週間とは思えないくらい）相互性の高い小集団活動が展開される事も見逃せない収穫であろう。

上記の2点の効果は、学業や学生生活、あるいは将来に対する学生自身の積極的な動機付けとなる。と同時に、本人が自分の生き方を見つめなおしてみる、広義のOrientation（日出づる東に向く、方針の決定、適応）の意味を持つものと考えられる。

以上、フィールドワークの概要を述べてきたが、覚悟はしていたとはいえ、不慣れな学生たちや私たちスタッフに

とって、農作業はきつい労働であった。援農どころかかえって能率を下げているのでは、のスタッフの問いかけに対して地元の方から頂いた、次の応えによって本稿を終えたい。

「米を育てるのには愛情が必要だ。我々はいつも生き物を育てている。生き物を育てるのも学生を育てるのも同じで、愛情が必要なのではないか。そのためには手間ひまをかけ、ゆっくりと愛情を注げば、後は勝手に育っていくもんだ。」

（学生部 職員）

---

## 課外教育活動

---

# フィリピンキャンプは「教育」か

——出会いのためのフィールド・エデュケーション——

西平 直

---

フィリピン・ルソン島北部の山の中。断崖絶壁の山道を、約7時間。マウンテン・プロビンス（山岳州）・サガダ村に着きます。マニラから数えれば、途中バギオでの一泊をはさんで、合計14時間のバスの旅。

きわどい崖っぷちでは息をのみ、通り過ぎれば拍手をし、揺れる座席のデコボコ道。みんな、何かを期待し、何かを恐れ、日本の都会の生活を脱ぎ去ってゆくのです。

サガダにつくと、学生たちは、いくつかの村に分かれます。好みや希望は一切なし。何かのご縁でめぐり合ったそのご家庭に、12日間、ひとりで泊めていただくのです。ブタ小屋わきで毎日「ライスにインゲン」を食べる家庭もあれば、カセットテープを聞きながら冷えたコーラを飲み放題の家もある。どんな家庭なのか。気が合えばいいけど。話がなくなったらどうしよう。それこそ不安と期待を胸に、ベースキャ

ンプ地、サガダをでてゆくのです。

キャンプの中心は、このホームステイ。その間、決められた課題はありません。なにしろ、その家族と、寝起きを共にする。一緒に生活させていただくのです。畑仕事を手伝うことになるのか。子どもと学校に通うことになるのか。ピクニックとしゃれこんで、冷たい川で泳ぐのか。はては、夜な夜な村のおじさん相手に、サンミゲル（ビール）とタプイ（どぶろく）に酔いつぶれることになるのか。

あちらの人はシャイです。初めは互いに、はにかみながら。でも、少しずつうちとけます。そして、彼らは親切です。よそ者を包み込む「やさしさ」を持っています。そのやさしさに助けられて、帰る頃にはずいぶん親しくなっている。翌年、その家庭を訪ねて、フィリピンまで一人で出かけて行く学生が、毎年、何人かいるのです。

フィリピンの中でも少数民族・イゴロットの人たち。その人たちと共に暮らすこと。一方的に見てくるのではない、本当の意味で出会うこと。顔の見える、固有名詞の、個人と個人のつき合いの中に入ること。忘れることのできない関係の中に入ること。それが、このキャンプの中心なのです。

さて、このホームステイから帰ってくると「ふりかえり」。これは、たんなる反省会ではありません。むしろ、大切な収穫・吸収の時。この体験が、自分にとって何であったのか。立ち止まり、反芻し、咀嚼する。ひとりひと

り自分の内側へと問い直し、それを互いに伝え合う。互いに分かち合う時を、必ず、持つのです。

学生たちは、言葉にできずに苦しみます。言葉にならない。人に伝わらない。でも、あえてその作業を共にします。それは、体験を固定するためではありません。そうではなくて、体験を自分の内側に染み込ませるため。瑞々<sup>みずみず</sup>しい体験を、生のまま、体の内側で熟成させるための時間なのです<sup>1</sup>。

その後、別れを惜しみながら、山を下ります。そして、蒸し暑いマニラに入って、ほんの少し、今度は都会を見て歩きます。有名なスモークーマウンティン。ゴミのなかで暮らす人々。ストリートチルドレン。そして、日系企業のビルが並んだマカティ地区。歓楽街。「円」さえあれば何でもできると、ふんぞり返る日本人観光客。

山の暮らしと都会の暮らし。どちらが豊かで、どちらが貧しいのか。山で親しくなったイゴロットの人たちの目で、この都会の生活を見て歩くのです。

合計3週間。ビザなしで滞在可能な日程を目一杯過ごして、再び、経済大国日本に帰ってくるのです。

ではなぜフィリピンなのか。フィリピンであることに、一体どんな意味があるのでしょうか。

まず、そこは戦争の傷跡を深く残しています。

1945年1月、アメリカ軍がリングアエン湾に上陸すると、日本軍は北へむか

って散りました。ルソン島北部の山中をさまよい、飢えと病の末、戦死者は、およそ50万。無念の思いで散っていった500,000人の骨の上なのです。しかも、その逃走途中で、そこに住むイゴロットの人達から米を盗り上げ、家を荒らし、さんざん迷惑をかけている。その中でホームテイをさせてもらうのです。

ですから、キャンプが始まった1980年頃<sup>2</sup>、周囲の視線はきつかった。歓迎されるどころか、まったくの不信感。疑いの目。山下奉文大将の「隠し金」を発掘に来たとの嫌疑もかけられた。「俺の父親は日本軍に、ここで殺されたんだ」とつめ寄られもした。それこそ、命がけの第一歩だったようです。

私も、ある牧師さんから、日本軍占領時代の「軍票ペソ紙幣」を渡されました。当時、持っていたペソは、全部この軍ペソ紙幣に替えさせられた。でも終わってみれば、これはただの紙切れ。全財産を日本に盗られたことになる。静かな口調で話してくれましたが、帰り際、この軍ペソ紙幣を私に手渡ししながら、「決して忘れないように」と念を押しました。

学生たちは、下手をすると、それを知らずに行く。戦争のことなど何も知らず、ノコノコ出かけてしまうことになるのです<sup>3</sup>。

もうひとつは、経済格差。南北問題。

大学の授業料はいくらかと聞かれて、ペソに換算して伝えたら、家の人がブツマゲ、静かになってしまったと、

学生が悲しそうに、笑って報告してくれました。

バギオの食堂で15人、たらふく豪華に食べて千ペソ。わずか4千円。10年前には、1ペソ20円だったのが、今では、1ペソ4円になっている。どんな鈍い奴でも、円とペソの格差を痛いほど見てしまう。〈円とペソ〉〈日本国とフィリピン国〉〈北と南〉の不平等を肌で感じてしまうのです。

なぜ私たちは、円を持っているからラクができ、なぜあちらの人達は、これだけ働いても、日本の子供の小遣い程度の収入なのか。そして、その経済構造でトクをするのは誰なのか。私たちの豊かさは、誰の犠牲の上に成り立つものなのか。

そうした問題を、理論としてではなくて、具体的な「この人」の生活の困難さとして、見てしまうことになるのです。

そして、三つ目に、開発と発展をめぐる、近代化の大問題。

この地方は、フィリピンの中でも、最も「開発」が遅れたところ。ようやく電気はやって来た。でも、一度台風が来ると、道路は寸断。陸の孤島になってしまいます。

生活レベルは、いたって質素。特に、キャンプ初期は、今とは比べものにならないほど、まだ「開発」されていなかった。もっともっと、プリミティブで、ネイティブで、ナチュラルな生活だった。学生たちに与えた衝撃は、随分大きかったようです<sup>4</sup>。

今でも、確かに不便です。でも、十分暮らせます。慣れると、トイレも「そんなに」困りません。そうした生活と比べたら、日本の都会の生活は、贅沢そのもの。なくたって生きてゆかれるものばかりです。

その贅沢に向かって「発展」してゆくことが、良いことなのか。それで人々は幸せになるのか。そして、私たちの暮らしは幸せなのか。哲学的な思索ではありません。いっしょに川まで水を汲みに行きながら、体が、そんなことを感じ始めるのです。

もし、アジアでなく、フィリピン・ルソン島でなかったら、悩まずにすんだであろうこうした課題と、このキャンプは初めからつき合い続けているのです。

それでは、こうしたキャンプは、どんな目的を持って続けられてきたのでしょうか。

例えば、このキャンプは、れっきとした大学のプログラムではありますが、では、何の「教育」プログラムなのか。

見て来たように、「アジア」の問題に関わります。「日本の戦争責任」にも触れないわけにゆきません。あちらの長老たちから、日本軍の残虐行為の話聞かされて、〈アジアの歴史の中の日本〉に気づいたら、それは、つらいけれども、嬉しいことです。

でも、それが目的というわけではありません。少なくとも、それを「教える」ことが、このキャンプの目的では

ないのです。むしろ、スタッフとしては、その逆を心配します。

フィリピンは「南」、搾取される側。会う人みんな、搾取される人。初めから、そういう既成の枠組みで見てほしくない。まして、もっと「貧しい」姿を見たいと、あちらの人に「せがんだり」してほしくないのです。まず、出会ってほしい。いっしょに笑ったり、困ったり、しみりしたり。そこから始めてほしいと思うのです。

ですから、異文化理解の教育プログラムとしてみれば、「効率」は良くないと思います。「観察」とか「調査」とか「実習」と比べたら、随分、モタモタしている。

私たちは、ただ、いっしょに生活する。受け入れていただく。傷つきやすい〈わたし〉のすべてををかけて、イゴロットの人たちの胸元に飛び込んでゆく。その出会いの〈ゼロポイント〉から始めようとするのです。

でも、こうしたつき合いも、捨てたものではありません。互いに傷つきやすい人と人とが知り合ってゆく、あの初々しい不安。それがうちとけてゆく、ほのかな微笑み。そうした体の内側で疼くような出会いの実感。このキャンプは、そこから、アジアに関わろうとしているのです。

第二に、このキャンプは、いわゆるボランティアではありませんが、不思議なことにボランティアにつながりません<sup>5</sup>。

もしこの言葉が、「人のために役立

つ奉仕」「貧しいアジアのための援助」を意味するならば、このキャンプは、ボランティアではありません。むしろ、逆。私たちは、援助しに行くのではなく、逆に、援助してもらってくるのです。お世話になりに行く。助けてもらいに行く。何かして「あげる」どころか、して「もらって」くるのです。そして「済まない」ような気持ちになって帰ってくるのです。

それでは、まるでテクノボーではないか、といわれれば、まさにその通り。私たちは、フィリピンに行く度に、おのれの「役たたず」を、イヤというほど自覚する。非力で不器用。自然の中を生き抜くたくましさがない。知恵がない。「日本の連中は、飢饉になったらラジオを食うつもりだろう。」田んぼで一緒に働きながら、あちらのオジサンが笑って言いました。

でも、もしかすると、こうしたおしゃべりが大切なのではないか。この関係を素通りした「援助」は、しばしば身勝手になる。独り善がりになる。人と人とのつながりにならず、モノとカネの関係になってゆく。そして結局、あちらのお偉い連中の私腹を肥やすことになるのです。

そうではなくて、もしボランティアが、人と人とのつながりであるなら、そして、互いの痛みを伝え合う「相互依存のタベストーリー」を織りなすことであるなら、こうしたモタモタした出会いから始めるしかない。そして、時間をかけた人と人との関係ができて初

めて、モノやカネの援助に移ってゆけばよい。

そうした意味では、まさにこのキャンプは、アジアへのボランティアの初めの一步。実際、このキャンプがきっかけで、様々な NGO に参加して行く学生が随分いるのです<sup>6</sup>。

三つ目に、このキャンプは海外への旅であり、異文化体験なのですが、ある学生にとっては掛け替えのない「人間関係トレーニング」でもあるようです<sup>7</sup>。

手軽なパック旅行と比べたら、その人間関係は極めて密。出発の二か月も前から、様々な準備をする。旅の道連れと、人と人との関係に入る準備をする。互いに殻をゆるめ、身体をほぐし、自分を伝え合ってゆくのです。

むろん、それを「煩わしい」と感じる学生もいます。でも、参加者相互は心を閉ざしておいて、あちらの人とだけ出会うというのは、変ではないか。隣の人と出会う感性と、アジアの人と出会う感性は、同じ「やさしさ」ではないか。

というより、正確には、あのやさしいイゴロットの人達の笑い声に助けてもらって、初めて、参加者相互が出会ってゆく。人と人とのつながりを取り戻してくる。あちらの人の胸に飛び込むやさしさが、仲間の胸に飛び込むやさしさを、よみがえらせてくれるのだと思います。

ですから、フィリピン3週を共にした仲間のつながりは、随分深い。何

年たっても、人と人とのつながりなのです。

このキャンプの主催は、チャペル。ディレクターは、チャプレン。そして、実質的な担い手は、職員の方々。献身的にフィリピンと大学との間を取り次ぎ、15年間、話をつないで来たのは、理解ある職員の方々でした。

それに、教員も参加する。しかし「教える」ことが期待されているわけではありません。そうではなくて、学生と一緒に、人と人とのつながりの中に入ってゆく。その中で、専門的な学識が生かされるなら、こんな嬉しいことはないわけです。でも、まずは「教える」のではない。共にいる。人と人との出会いの中に入り込んでゆく。そして、「大学教授」の鎧が固ければ固いだけ、それが和らいでゆくプロセスは、周りの人を励ますことになるというものです。

日本の大学は、今、情けないほど、問われています。

教室の教育だけではダメだと言われます。言葉だけ、頭でっかち、知識の一方通行、情報過多。そして、教室から外に出て行く体験的プログラムを、世間は期待し、学生たちも歓迎するのです。

でも、外に出て行けば、それで良いのか。教室での教育を、そのまま外に持ち出せば、それで新しい「教育」をしたことになるのでしょうか。

そうではなくて、むしろ、教室での

教育イメージとは異なる、何か別の「教育」イメージが求められているのではないか。その、今までと違う「教育」イメージこそ、このフィリピン・キャンプを始めた大郷博という先生が、「フィールド・エデュケーション」という言葉に込めたことではなかったか。そんなふう思うのです<sup>8</sup>。

むろん、見て来たように、そうした「教育」はモタモタしています。目に見える成果は、すぐには出てきません。むしろ、学生たちは混乱したりする。考え込んでしまったりする。教室での教育と比べたら、効率は悪いのです。

でも、蒔かれた種は、ずっと心の奥に潜んでいる。都会の日常生活にはなじまない、異物のような引っかかりとして残ってゆく。そして、タイムスパンを長くとったら、実は、思わぬところで、自分の根っこになっている。そんなことなのではないか。

しかし、常にそうなるとも限らない。意図的・計画的な営みを越えている。目的を立て、その通りの成果を出すという、人為的な営みを越えている。その意味では、もはや、教育を越え出てしまっている。それが、「人と人とが会う」ということなのだと思います。

そうした、教育を越え出た、もはや教育にあらざる「教育」イメージを根っこに持ったフィールド・エデュケーション。その「教育」を、キャンパス・エデュケーションと同じだけ、大切にすること。そして、その両者の間を、何度も何度も往復すること。もう

しばらく、私は、そこに期待したいと思います。

## 註

1 学生たちは、参加申し込みの際「参加動機」を提出し、キャンプ中に「ふりかえり」の時をともにし、キャンプ後、今度は文字による「ふりかえり」を、日本語と英語によって作成し、お世話になったあちらの方々に届けることになる。

2 このキャンプは、1979年以来、15年、途中3回の中止を余儀なくされ、今年度で12回目であった。参加学生の総数、約300名。スタッフを勤めた教職員も、約30名になる。藤原芳行「フィリピン・キャンプの十五年を振り返って」(『チャペルニュース』第436号1995年10月号)に依る。

3 フィリピン戦については、さしあたり、新美彰・吉見義明『フィリピン戦逃避行』(岩波ブックレット307, 1993年)。また、上田敏明『聞き書きフィリピン占領』(勁草書房, 1990)は、このキャンプ参加がきっかけとなったフィールドワークの記録である。更に、1981年第3回キャンプに参加された法学部の神島二郎教授は、「戦争と日本人—三十六年目にルソンの旧戦場を訪ねて—」と題した文章を、雑誌『立教』(第100号, 1982年)に残して

おられる。

4 イゴロットの人々の伝統的生活については、大崎正治『フィリピン国ボントク村』(農文協, 1987年)。より専門的には、“IGOROT vol.1 ethnographies of mager tribes, vol.2 contemporary life and issues,” (Cordillera School Group/ Easter School, Baguio City, 1987)

5 拙稿「フィリピンキャンプはボランティアか—ヒューマンリレーションズ・キャンプということ—」(『立教』第147号, 1993年)参照。

6 例えば、木村恵津子「サバンナの地で想うこと」(『立教』第147号, 1993年)など参照。

7 拙稿「『やさしさ』へのふりかえり」(『UP』東京大学出版会, 1994年1月・2月号)参照。

8 こうした危険を伴う、文字通り冒険的な試みを始められた「大郷博」元チャプレンは、どんな想いでこのキャンプを始められたのか。そしてまた、大学を離れたのち、奥飛騨で開始された実践教育活動「あぶらむの宿」の中で、その「教育」理念はいかに引き継がれているのか。私にとって、フィールドエデュケーションを構想してゆく時の原点であり続ける。

(文学部 学校・社会教育講座 助教授)